

## ジョン・フォレスターと精神分析

井上 卓也

イギリスの哲学者ジョン・フォレスター (1949-2015) は、ラカンの初期セミナーの英訳者であるほか、生涯に (共著も含め) 7 冊の著作を残した精神分析史の第一人者として知られている。これらの著作は、その緻密な資料読解や独自のテーマ設定により、精神分析の歴史に関心を抱く者にとって重要な参照項であり続けている。だが、フォレスターの功績は、精神分析成立の文脈や、その運動としての発展経路を明らかにした、ということにとどまらない。私見では、彼の仕事を真に際立たせているものは、広い意味での科学思想史において精神分析が持つ意義を把握するうえで彼が切り拓いた、独自のパースペクティブにこそ見出されるべきである。その際フォレスターは、彼自身の出自である科学論に加え、歴史学や社会学、フランス現代思想にまで至る広大な知見を動員しながら、理論的な枠組みを構築していく<sup>1</sup>。本稿では、このようなフォレスターの試みを、以下の2つの論点から吟味する。それは第一に、個別の事例を通じて普遍性を持つ知識の生産・伝達を目指すという、精神分析における個と普遍の関係の問題であり、第二に、精神分析が患者の疾患や夢を解釈の対象とするのみならず、分析家と患者との関係そのものを対象化していく、という「再帰性 (反省性, reflexivity)」の問題である。これらがフォレスターの最も野心的な研究プロジェクトである「ケース」論において合流していることを確認し、今後の精神分析をめぐる思想史研究に対するその射程を検討することが、ここでの私たちの目標となる。

### 1. 文献学と精神分析

初期フォレスターの重要な背景として見逃すことができないのが、フリーコーの『言葉と物』における精神分析の位置づけである。『言葉と物』の中核をな

す主張の一つとして、18世紀末以降の新たなエピステーメにおける「人間」の登場、という議論があることは、すでによく知られている。フーコーによれば、古典主義時代の博物学、富の分析、一般文法が同一性と差異による表象の秩序化をこととしていたのに対し、19世紀の生物学、経済学、文献学は、この表象の平面を深層から支えるものとして生、労働（需要）、言語といった対象領域を見出す。人間はここでは、生物の進化、経済・社会の発展、言語の発達といった法則に従属する、有限な存在者として現れる。ところが、人間を経験的に規定しているこれらの法則は、主体の意識的内省には決して現れることがない。つまり、ここで人間は「われ思う」を常に逃れるこの「思考されざるもの」(l'impensé)を、自らのうちに抱え込むことになるのである (Foucault, 1966, pp. 333-336)。思考の主体として認識の超越論的基盤でありながら、同時にその「他者」、すなわち(コギトに対して不透明な)経験の対象でもある、というこの「経験的・超越論的二重体」こそ、フーコーが「人間」と呼ぶものに他ならない。周知のとおり、カントは対象の経験的な認識に対し、その可能性の条件として超越論的な認識形式があることを示そうとした。だが、このような批判哲学による区別の試みにもかかわらず、19世紀において超越論的なものと経験的なものは、互いに解きがたく結びついていく。すなわち、一方で生・労働・言語に関して経験的に見出された知は、人間の認識そのものの条件として思考の主体の側に反映される。他方で超越論的なものの探求としての哲学は、人間に関するこれらの経験的領域を自らの考察の対象としていくことになるのである (p. 352)。

このような知的布置に、フーコーは心理学、社会学、神話学といった「人間科学」の登場を位置づけている。生物学、経済学、文献学をモデルとする人間科学は、さしあたりこれらの科学からそれぞれ機能 (fonction)、葛藤 (conflit)、意味作用 (signification) という概念を借用し、正常と異常、文明と原始社会、意味と無意味を区別する(軸となるモデルは19世紀を通じて生物学から文献学へと緩やかに変化するとされる)。だが人間科学は、意識の実定的内容として現れうるこのような機能、葛藤、意味作用から、決して実定的に与えられることはないが、この内容を条件づけている規範 (norme)、規則 (règle)、体系 (système) へと徐々に分析の焦点をずらしていく。こうして、機能から規範へ、葛藤から規則へ、意味作用から体系へと中心概念が変化することにより、人間

科学の対象領域における固有の一貫性が把握され、上記の区別による分割を維持することはもはや困難となる (pp. 368-372) . そしてフーコーによれば、精神分析こそこうした人間科学内部の変化の先触れをなすものに他ならない.

他の誰にもましてフロイトこそ、人間に関する認識に文献学的・言語学的モデルから接近したということ、しかしまた彼こそ、ポジティブなものとなガティブなもの (正常と病理, 理解可能なものと伝達不可能なもの, 意味あるものと無意味なもの) の分割を徹底的に抹消しようとした最初の人物でもあることを考慮するならば、私たちはいかにフロイトが、機能、葛藤、意味作用による分析から、規範、規則、体系による分析への移行を告げ知らせているかを理解するだろう. (p. 372)

生命を有し、経済活動を行い、言葉を用いる存在として「人間」を出現させる生物学・経済学・文献学は、同時にこの「人間」にその有限性 (生物学的・経済的・言語的法則による規定) を示す. だが、一般に人間科学は意識のうちに表象可能な内容に軸足を置き続けることで、表象の背後にあるこのような有限性に輪郭づけられた「人間」が、自己自身の歴史的な成立条件となっているという事実と直面することを避けている. これに対し、無意識を扱う精神分析は、「転移という特異な関係を用いることで、表象の外的限界に欲望、法、死を発見する」 (p. 389) . 精神分析は、意識がとらえることのできる「人間」の実定的次元を超えたところに、この「人間」の条件としての有限性を直接見出す. こうしてフーコーは、自ら素描する「人間科学の考古学」のなかにおいて、精神分析 (および民俗学) に「人間科学において現れうるような人間そのものではなく、人間についての知を一般に可能とするような圏域を探究する」 (ibid.) 領域、という特別な地位を与えているのである.

フォレストは初期のフーコー論<sup>2</sup>において、『言葉と物』が精神分析に与えるこの地位を「メタ人間科学」、すなわち「そもそも人間科学が存在する可能性そのものを批判し続ける科学」 (Forrester, 1990b, p. 296) , とパラフレーズし、その意義を強調している. フォレストがその研究を開始した70年代には、フロイトによる精神分析創設を顕揚するこれまでの偉人伝的歴史記述 (ジ

ョーンズのプロイト伝など)を相対化する研究が複数登場していた。ただし、エレンベルガー、サロウェイらによるこれらの批判的仕事は、フロイトの直接の出自をなす医学や神経学、生物学といった文脈を特権視する「内在論的(internalist)」アプローチを採用することで、ともすればフロイトの言説の「先駆者」探しに終始することになる。こうした還元主義的記述は、創始者フロイトの偶像破壊に大きな力点を置くあまり、20世紀の学術・文化において精神分析がこれほど重要な位置を占めた理由を十分説得的に提示することができていない。では、フロイトを英雄視する伝記主義と安易な還元主義の双方をしりぞけつつ、精神分析を歴史の中に位置づけるには、どのような記述の枠組みを設定すべきなのだろうか—人間科学の系譜に精神分析を位置づける『言葉と物』の議論は、この点で今までにないパースペクティブを拓くものだった。

経済学や文献学に対するフーコーの強調が正しいとすれば、私たちは精神分析に隣接する[医学や生物学とは]異なる知識の源泉や領域を探し求めるのがよい、ということになる。記号、意味作用の体系、および意味といった諸概念、テキストを解読するために文献学者、神話学者、文化人類学者により練り上げられた一連の方法、意味あるものと無意味なもの、常識とナンセンスの間の境界の絶えまない解消、またこれと並行する、正常と病理の境界の解体—これらすべては、19世紀の言語科学の方法と知見から借用され、これらに基いて築き上げられた精神分析の根本特徴である。(p. 308)

フーコーを参照項としつつ、従来の内在論的な枠組みを乗り越え、より多様な文脈から精神分析を理解すること—精神分析の歴史的コンテキストとしての文献学、という主題を扱うフォレスター最初の著作『言語と精神分析の起源』(1980) (以降『起源』と略記)がこのような関心に導かれていることは、著者自身「19世紀の文献学に関するフーコーの章は、文献学と精神分析の間の近縁性と系譜学的関係を論じる私自身の試みにおいて、精神的な支えと素材上の土台を与えるものであった」(p. 288)と証言していることから窺える。ただし、『起源』はフーコーの見方にただ追随するにとどまらず、この「文献学と

精神分析の間の近縁性」を、「個別的なものの科学は可能か」というアリストテレス以来の伝統的問いと絡めて論じている。この点でこの著作は、イタリアの文献学者セバスチアーノ・ティンパナーロがマルクス主義的立場から行った精神分析批判との対話として読むことが可能である。ティンパナーロは『フロイト的言い間違い—精神分析と文献批判』(Timpanaro, 1985 [1974])においてフロイトの『日常生活の精神病理学』を取り上げ、精神分析における解釈の方法を批判している。ティンパナーロによれば、フロイトが挙げる言い間違いの例は、文献批判においてしばしば問題となる、写本家の一般的なテキスト歪曲の傾向として説明可能である。これに対し、フロイトの精神分析的解釈は、言い間違いを犯した個人に特異な原因を探ろうとする。(文献学を含む)科学が一般的な説明に踏みとどまるのに対し、フロイトはこのような過度の個別化を行うことで、精神分析をむしろ魔術に接近させてしまっている、と論じることで(p. 85-92)、ティンパナーロは科学を重視するマルクス主義者として、当時の左派思想における精神分析の流行に対し警鐘を鳴らすのである。

以前拙稿で示したように(Inoue, 2017)、ティンパナーロの『フロイト的言い間違い』は、カルロ・ギンズブルグが「痕跡—徴候的パラダイムの根源」(Ginzburg, 2010[1979])を執筆するきっかけとなった著作でもある。ギンズブルグはそこで、精神分析における「個別化する説明」というティンパナーロの指摘を受け入れながらも、これをまったく非合理的なものと看做すのではなく、「痕跡、症状、徴候によってのみ再構成されうる、個別的なケースの分析」を行う「徴候的パラダイム」の系譜に位置づけなおす。このような個を扱う認識モデルとしての「徴候的パラダイム」は、古代の狩猟・ト占の実践から発して医学の症候学に継承され、一般化、法則化をこととする「ガリレイ的科学」が近世に成立した後もその命脈をつなぎ、19世紀末に精神分析、美術史、犯罪科学といった領域で再浮上する。そしてギンズブルグによれば、(ティンパナーロが依拠するような)文献批判における形式化という例外はあるものの、文献学もおおむねこの「徴候的パラダイム」に帰属しているのである<sup>3</sup>。

ギンズブルグ同様、フォレスターも『起源』において、個別化する精神分析＝魔術的説明と一般化する文献学＝科学という単純な二分法をしりぞける。「初期の分析家によって用いられた方法は文献学的な性格のものだった」(Forrester,

1980, pp. 65-66) とするフォレスターは、解釈の対象となる事例の個別性とその解釈の普遍的妥当性の間をつなぐものとして、精神分析による文献学への参照を位置づけている。ここでは、とくに精神分析の象徴論に関する分析をみてみよう。フロイトは『ヒステリー研究』(1895)から『夢解釈』(1899)に至る最初期の著作において、象徴的解読の方法に対し強い警戒を示していた。フォレスターはこのフロイトの態度を、「あらゆる夢とあらゆる神経症の構造の個別性、という彼の確信」(p. 76)と関連付ける。これらの著作でフロイトは、さまざまな夢や症状の形成に共通するメカニズムを論じている。しかし、そこで素材となるのがつねに個人の特異な経験である以上、同一のメカニズムがつねに同じ夢や症状を生むとは限らない。フロイトが、夢の主題や症状の特徴を一樣に(誰が夢を見たか、ということに関わりなく)きまった意味に変換する象徴的解読に抵抗し、個人の自由連想を重視したことは、このような洞察に基づくものだった。ただし、以降精神分析が運動として発展し、解釈の普遍的妥当性を保証しようとする要求が現れてくるなかで、フロイトもユングやシュテーケルらが提唱する象徴論を部分的に受け入れるようになる。例えばフロイトは、夢や神話に現れる象徴が「系統発生的記憶」という匿名の記憶に由来する、というユングの主張を認める。しかし、だからといってフロイトは個別性を尊重するアプローチを捨て去ったわけではない。ユングが系統発生的記憶(集合的無意識)を分析の終点とするのに対し、フロイトにとってこの記憶は、そこから「個別的な細部を埋めていく」という真の分析の作業が始まる出発点であるにすぎない。象徴はここでは解釈の普遍性を大枠において保証すると同時に、個人の連想を通じて夢や症状の個別的な規定を明らかにするための素描、として機能する(p. 109)。さらに、フロイトとユングは象徴と言語の関係を捉える仕方においても対立している。ユングにとって象徴とは、匿名的で同質的なリビドを代理する、言語以前の思考である。象徴は言語的思考の特徴である論理性を欠いた太古の思考として、時代や個人を超えて常に同一の意味を指し示す。これに対しフロイトは、一見非言語的なイメージであるかのように思われる象徴を言語使用から派生したものと看做す。つまり、象徴の使用が太古への退行であるとしても、フロイトにとってそれは非論理的な思考への退行ではなく、言語の起源への退行なのである。象徴の解釈に言語的構造を介在させるこ

とで、フロイトは自由連想を通じて明らかにされる現在の個人における言語使用と、(文献学によって裏付けられる)太古の言語使用の残渣という両面を共存させようとする。こうして「文献学的分析は、普遍主義を指し示しながら、にもかかわらず各々の解釈規定の個別性、独自性に土台を与えることができる」(p. 120)。すなわち、フロイトの文献学への参照は、解釈の個別性とその普遍的妥当性を和解させ、精神分析が行う説明を安定させるという機能を担っているのである。

## 2. 「フロイト」という事例=ケース—「夢の読者たち」

精神分析における個と普遍の緊張関係、というこの主題の展開として、次に論文「夢の読者たち」を取り上げてみよう。このテキストが扱うのは、精神分析においてフロイトという個人が占める特権的な地位という問題である。地域や時代によって差があるとはいえ、精神分析家にとって創始者フロイトの著作が突出した権威を有していることは、しばしば指摘されている。だがこのことは、個人の権威を通じてではなく、専門家のコミュニティによる絶えざる検証・修正を通じて保証されるという科学知の普遍的性格といかにして折り合うのだろうか。すでに見た通り、フォレスターは従来の精神分析史におけるフロイト中心主義からは批判的距離を取ろうとする。しかし、これまで精神分析をめぐる言説がフロイトを中心に組織されてきたこともまた、説明を要する事実である。あるいはむしろ、科学的実践としての普遍性を強調するにもかかわらず、「フロイト」という個人と特権的に結びついているというこの逆説にこそ、精神分析という特異な営みを理解する鍵があるとは考えられないだろうか。だとすれば、フォレスター自身『起源』ですでに述べているように (p. ix)、「あらゆる分析家がフロイトと結んでいる関係、およびあらゆる精神分析的テキストがフロイトのテキストと結んでいる関係」が、改めて問われ直さなくてはならないだろう<sup>4</sup>。

こうした問題意識から、フォレスターは「夢の読者たち」においてフロイトの『夢解釈』という著作に注目する。1899年に出版され、自由連想法に加え心的装置の理論をフロイトがはじめて体系的に提示した同書は、精神分析を学ぶ

者が避けて通ることのできない記念碑的著作として位置づけられてきた。他方で『夢解釈』は、フロイトが1890年代後半に行った自己分析の産物として、自伝的な性格をも備えている。事実、そこで解釈される主要な素材はフロイト自身の夢からとられており、私たちはこれらの夢の分析を通じて彼の人生の断片を覗き見ることになる。フロイト自身第2版の前書きでは、『夢解釈』が父の死（フロイトの父ヤーコブは1897年に亡くなっている）という「一人の男性の人生にとって最も決定的な喪失」に対する反応であった、と述べている（Freud, 1942, S. X）。では、いかにしてこのような自伝的書物が、精神分析という世界的な運動と組織を生み出すことができたのだろうか<sup>5</sup>。フォレストーによれば、この点にこそ精神分析の発展を他の科学的運動から区別する特徴が見て取られるべきなのである（Forrester, 1997a, pp. 138-140）。

よく知られるように、『夢解釈』は「夢は欲望充足である」という中心的命題を持つ。だがそもそも、フロイト個人の夢からあらゆる夢に妥当する普遍的命題を導き出すことなど可能だろうか。実際にこれは『夢解釈』出版直後から多く寄せられてきた批判であった。しかし、フォレストーはこのようなフロイトの態度を、あえて現代の物理学者の例と比較してみせる。

重力に従う1つの物質があらゆる物質を代表すると考える現代の物理学者、あるいはヘモグロビンの1つのサンプルがあらゆるサンプルを代表すると考える生物学者のように、フロイトは1人の夢見る者が全ての夢見る者を代表すると想定する。この点でフロイトは、1つの現象領域の特性が示す多様性をこそ研究対象とする生物測定学者や統計学者とは、まったく似ていない。

CERN（欧州原子核研究機構）の実験室こそ、素粒子以下のレベルに関する有意な結果をもたらさうる地上で唯一の場であるということ、疑問視することも不安に感じることもなく受け入れている現代の物理学者たちのように、フロイトは振る舞っている、とすることができる。（…）フロイトにとって、彼が自身を表しているところの「おおよそ正常である人間」の夢は、疑いもなく万人にとってのあらゆる夢の普遍的理論を構築するための、十分な基盤なのである。（pp. 163-164）

ここでフォレスターは、人間科学を厳密科学から区別するフーコーの立場からは遠ざかるとともに、従来の理想化された科学像の問い直しを推し進めた新しい科学論を念頭に置いている<sup>6</sup>。後述するように、当時フォレスターはクーンの「模範例」(exemplar)という概念を参照しながら、精神分析のエピステモロジーを「ケースによる思考」として論じようとしていた。「夢の読者たち」が示そうとするのは、「フロイト」という個別の事例が、『夢解釈』という書物を通じてまさに模範例として機能している、ということである。自らの夢の解釈を通じてなされたフロイトの「自己分析」は、しばしば反復不可能な例外的出来事として神話化されてきた。というのも、精神分析運動は以後このような自己分析の困難を認識し、他の分析家との精神分析を実地に経験することを、精神分析家養成における不可欠の要件として制度化してきたからである。では、この自己分析は傑出した人物のみに可能な、一度きりの営為だったのだろうか。しかし、フロイトといえど決して孤独に自己の分析を行っていたのではないことは、彼が自身の夢とその解釈をヴィルヘルム・フリースに向けて書き送っていたことから明らかである。残念ながらフリースからの返信は残されていないものの、このベルリンの友人が送付された夢やその解釈について様々なコメントを行っていたことは、フロイトの文面からも窺える。つまり、ここでは読者フリースがいわば「分析家」の機能を果たし、フロイト自身はその「患者」の位置を占めているのである。ただし、フォレスターの議論におけるアクセントは、フリースこそフロイトに先立つ最初の精神分析家であった、というこれまでも繰り返されてきた主張にあるのではない。むしろ彼の関心は、最初フリースが担っていたこの「読者＝分析家」の審級が、出版されたテキストとしての『夢解釈』にも反映されている、という点にある。『夢解釈』の成立については、フロイトが「ドレコロジー」(糞便学)と題して1897～98年にフリースに送付した一連の(自己分析を内容とする)テキストが、その後この著作に取り入れられたことが知られている。つまり、はじめフリースという唯一の読者に向けられていたテキストが、『夢解釈』という公的な出版物に姿を変えるのである。ここからフォレスターは、次のような大胆な問いを提出する。

それゆえ、フリースが最初の読者としてフロイトの分析家であった、と考えるならば、私たちは『夢解釈』の最初の読者たち自身をフリースが担っていた分析的機能に参与するものとして描き出すよう誘われる。(…)従って、フロイトの読者たちはフロイトに対して分析家の位置に立っているのだ。読者と夢の書き手との間に成立するこの分析的な紐帯は、分析の機能そのものについて私たちに何を語るだろうか。フロイトの分析家となることに対して、読者たちはどのように反応するのだろうか、あるいは反応したのだろうか。(pp. 143-144)

では、「最初の読者」フリースの分析的機能とは、具体的にいかなるものだったのか。フリースに宛てられた数々の書簡は、互いの生活や仕事に関心を寄せ合う両者の親密な関係(精神分析の用語でいう「転移」)を証している。だがこの他にも、フリースは『夢解釈』成立において実質的な役割を果たしていた。例えば、夢の分析において私生活の内密な事情(そこには友人たちに対する敵意や軽蔑が含まれる)を打ち明けるフロイトに対し、フリースはそのような箇所を出版時には削除するよう求めている。またフリースは、フロイトが行う夢の解釈があまりに機知的な性格を持つことに対して苦言を呈してもいた。従って最初の読者=分析家フリースは、フロイトにとって転移の対象であるとともに、検閲者であり、また批判者である。フォレスターが目指すのは、夢を見るフロイトと最初の読者フリースの間に成立しているこの転移・検閲・批判といった関係が、その後著者と読者の関係として『夢解釈』の中に折り込まれていくことである。『夢解釈』第2章において、フロイトは有名な「イルマの注射の夢」の記述に先立ち、ここで示される素材が著者自身の夢であること、従ってその解釈は自己分析とならざるを得ないことをことわったうえで、次のように読者に要請している。

だが、いまや私は、一定の期間私の関心を自らのものとされ、私とともに私の生活の些細な事柄に沈潜されるよう、読者にお願ひしなくてはならない。なぜなら、そのような転移が、夢の隠された意味に対する我々の関心を断固として呼び出すことになるからである。(Freud, 1942, S. 110)

フロイトはここで、自身の私生活を開示し好奇心を惹きながら、読者を夢の心理学の核心へと導こうとする。きわめて個別的な素材（フロイトの夢）から、「あらゆる夢は欲望充足である」という普遍的な命題が導かれるという逆説は、フロイトが仕掛けるこのような巧妙な戦略から理解されなくてはならない。つまり読者は、夢を見るフロイトと同一化し（転移）、彼の例に即して夢を分析することで、フロイトの学説を吟味し、最終的に承認するよう仕向けられているのである。

しかし、実のところ、『夢解釈』においてフロイトの夢が完全に解明されることはない。フリースも警告していたように、一般的な良識に従えば、夢の背景にある個人的な生活の全貌を出版物で明かすことは慎まざるを得ないからだ。こうして「読者」フリースが果たす第二の機能、つまり検閲が、『夢解釈』にも現れていることになる。しかもフォレストアの分析によれば、ここでは著者と読者が相互に検閲者の役割を占めている。すなわち、一方で読者はフリース同様フロイトによる秘密（欲望）の赤裸々な告白に眉を顰め、その自己開示を抑制させる検閲者として現れる。他方で部分的な解釈のみを与える著者フロイトは、夢を突き動かす欲望を探ろうとする読者に対し検閲者として立ちほだかるだろう。しかし、この後者の検閲はまた、フロイトの夢を彼以上に深く解釈してみたい、という欲望を読者たちに与えずにはおかない<sup>7</sup>。かくして読者は、フロイトの夢理論に関心を抱かせるべく仕組まれた『夢解釈』の戦略に、ますます深入りすることになる。秘密を明かしつつ隠す「この複雑な構造、自己開示と秘匿の劇は（…）読者をこの書物の自伝的・個人的な要素によって惹き寄せながら、同時にその科学的主張、普遍性に関して確信させるものなのである」（Forrester, 1997a, p. 175）。言い換えれば、『夢解釈』は単なる自伝的著作ではなく、「読者をフロイディアンに変える、という教育的かつ分析的目的のための自伝なのである」（p. 163）。

だが、ここでフロイトが想定するのは、著者の要求に素直に応じる好意的な読者ばかりではない。実際、フロイトが自身の夢から取り出した命題をあらゆる夢に一般化しようとするならば、やはりフリースがそうであったような、批判的な読者をも上述の戦略に取り込んでいかななくてはならないだろう。『夢解

『夢解釈』のテクニカル仕掛けが巧妙なのは、まさにこの点にある。フロイトは『夢解釈』第4章において、「あらゆる夢の意味は欲望充足である」という主張に対し、読者が示すと思われる反論を先取りしている。すなわち、フロイトのこの主張は、苦痛な夢、不安夢のような欲望充足に反する夢の存在によって否定されるのではないか、という反論である。この点についての理論的解決は、夢の欲望を形成する潜在的夢思考の審級と、この欲望を検閲する審級、という2つの心的審級の区別によりもたらされる。つまり、夢に現れている苦痛や不安は検閲を行う審級による偽装にすぎず、これらの夢も潜在的夢思考のレベルでは欲望充足と看做すことができる、というわけである。だがここでは、こうした説明よりも、フロイトが同じ個所において、彼に反駁するために患者たちが持ち出した夢を取り上げていることに注目すべきである。例えば、ある女性患者が、夢は欲望充足であるという説明をフロイトから告げられた翌日に見た夢がある。この夢は、休暇を過ごすために姑と一緒に田舎の家に向かう、という内容を持っている。ところが、避暑先で姑と同居することこそ、まさにこの患者が回避したいと思っていたことなのである。これはフロイトの欲望充足説に対する、明白な反証ではないだろうか。これに対するフロイトの答えは、この夢は「フロイトが間違っていればよいのに」という彼女の欲望を充足している、というものである。患者にとって欲望に反するように見える夢の顕在的内容は、実際にはフロイトに反論する、という別の欲望に奉仕しているのである。ただし、この欲望はフロイトの夢学説のみならず、患者の分析そのものとも関連している。患者がこの夢を見る以前に、フロイトはある出来事が患者の病気にとって意味を持っていることを指摘していた。彼女はそのような出来事は思い出せないとして否定したのだが、その後分析が進行するにつれてフロイトの解釈の正しさが明らかになる。「フロイトが間違っていればよいのに」という欲望は、この出来事が実際に生じていなければよいのに、という思い、すなわち分析家の解釈に対する抵抗と結びついていたのである (Freud, 1942, S. 157-158)。

フォレストーによれば、『夢解釈』のテクニカルは批判的な読者をこのような患者と同じ場所に据えている。つまり患者によるフロイトへの抵抗が最終的に打破される過程を上演することで、フロイトは読者を批判者から「フロイディアン」に変えるよう仕向けるのだ。『夢解釈』の読者は、著者フロイトに対す

る同一化および抵抗という両極の転移関係を通じて、精神分析の理論と方法をわがものとすることを求められる。『夢解釈』はこの点で、まさに「転移機械」(Forrester, 1997a, p. 183) と呼ばれるにふさわしい。こうしてフロイトの自伝的夢は、「あらゆる夢見る者と読者にとって模範的なもの」(p. 165) となる。以降の精神分析において、『夢解釈』に精通することこそ「フロイディアン」の重要な資格とされていたことは、書物という媒体を通じた精神分析の伝達という(当時の)フロイトのこの戦略が、一定の効果をあげたことを物語っている。

「姑と一緒に田舎の家に行く夢」の分析にみられるような、反論を自身の学説に回収していくフロイトの論理は、精神分析の敵対者たちに格好の攻撃の種を提供するだろう。実際、90年代以降英米圏を中心に吹き荒れた精神分析バッシング(「フロイト戦争」)でしばしば標的とされたのは、精神分析で理論や治療効果のエヴィデンスとして挙げられる症例の記述や解釈が、フロイトをはじめとする分析家の関与によって汚染され、操作されている、ということであった。この見方では、患者は専らフロイトの強力なレトリックによって彼の意図に一方向的に支配される、無力な受動的存在として描かれることになる<sup>8</sup>。そもそも精神分析の治療空間において、転移の外部は存在しない。夢理論に対する患者の反論が「フロイトが間違っていればよいのに」という欲望として受け取られたように、患者の語りは絶えず分析家との関係性のなかで解釈される。ここには、対象を中立的に観察し記述するための足場はない。だが、フォレスターによれば、これこそ「フロイトが人間的な諸関係の根本的特性として指し示すもの」(p. 159)なのである。人間的な事象の理解においては、絶えず「不純」なエヴィデンスから確からしい認識を求めざるをえないこと—フロイトはこの点をはっきりと洞察していた。実際、人類学や社会学といった他の領域においても、対象を観察者の関与から純化するのではなく、むしろこの関係性そのものを再帰的・反省的に対象化することで、知識の客観性を保証することが試みられてきた。マイヤーが指摘するように(Mayer, 2017, p. 163)、フォレスターによる重要な功績のひとつとして、精神分析におけるこのような再帰的性格に目を向けたことが挙げられる。「夢の読者たち」に従えば、夢という対象のメカニズムを記述する欲望やその検閲・批判といった語彙は、同時に分析家と患者、著者と読者の関係をも分節化する。『夢解釈』を読む行為を通じて、読者

はときにフロイトの夢を解釈する分析家の立場に、ときに分析家フロイトの夢理論を批判する患者の立場に据えられる（「最初の読者」フリースは、まさにフロイトの分析家と批判者というこの両方の役割を引き受けていたのだった）。このような、分析家と患者、あるいは著者と読者の相互作用を通じて、分析家のみならず患者・読者も精神分析が生み出す知の証人となり、その実践の過程に主体的に参加するよう促されるのである。「フロイト戦争」が流布した、独裁者フロイトと彼の被害者たち、という精神分析運動の戯画化されたイメージに対し、フォレスターはここで精神分析の臨床における分析家と患者の力学、また『夢解釈』の読書が前提とする著者と読者の力学<sup>9</sup>を浮き彫りにすることで、精神分析の知識生産・伝達における複数のアクターの協働を示すことに成功している<sup>10</sup>。

### 3. 「ケースによる思考」

以上で検討したフォレスターの2つの主題、すなわち精神分析における個と普遍の関係および再帰性という主題は、次第に彼の「ケース」論に結実する。これは、一定の人間科学の領域において個別の「ケース」（症例、判例など）を通じて思考するという「推論のスタイル」（*style of reasoning*）が存在することを示し、そこに精神分析を位置づけるものである。ここではまず「推論のスタイル」論を最初に提示した、イアン・ハッキングに触れておこう。ハッキングは科学史家クロムビーが科学における方法上の区別として挙げた6つの「科学的思考のスタイル」（数学における単純な仮定、実験による探究、類推的モデルによる仮説構築、比較と分類による変数の秩序付け、母集団の規則性についての統計的分析と確率の算出、遺伝的発達の歴史的導出）を踏襲しつつ、「推論のスタイル」という新たな名称を与えたうえで、これらのスタイルに応じて複数の科学的合理性が存在することを論じていく（Hacking, 2002a）。ただし、ハッキングの立場は、私たちが採用する思考様式により真理が変化する、といった類の主観主義とは区別されなくてはならない。推論のスタイルは、科学的命題の真偽そのものを直ちに決定するわけではない。むしろ彼が主張しているのは、私たちが身につけている推論のスタイルによって、「合理的」で「客観

的」と看做されうる命題の範囲が規定されている，ということなのである．より厳密に言うならば，「命題が真または偽となりうる候補としていわば手元にあるか否かということは，私たちがその命題について推論する仕方を手にしているか否かによる」(p. 160)．この主張から帰結するのは，ある命題の合理性がそれを扱うのに適した推論のスタイルに依存するとすれば，これとは別の推論のスタイルに基づいて当該の命題を批判することはできない，ということである．例えば水銀が梅毒治療に有効であるとするパラケルススの教説は，一連の類似に基づく推論を前提としている．しかし，ルネッサンス期の推論のスタイルを共有していない今日の科学にとって，このような教説はそもそも吟味の俎上に載せられることすらない．現代においてパラケルススの命題は，真・偽の候補となる可能性をそもそも欠いている．だが，私たちはパラケルススと同様の推論のスタイルを習得しない限り，この命題を偽と結論することもできない(p. 171)．命題の真理値は当の命題が依存する推論のスタイルを用いることではじめて決定できる以上，このスタイルの外部に推論を保証ないしは論駁する根拠を求めることはできないのである．

従ってこの推論のスタイルは自己保証的(self-authenticating)であり，一定の知識に安定性を生み出す「自己安定化のテクニック」である(Hacking, 2002b, p. 195)．ハッキングによれば，推論のスタイルは単なる思考のプロセスであるにとどまらず，「対話し，議論し，示す」という公共的な過程，さらには(通常「推論」という言葉が持つ意味を超えて)「操作する手」や「注意深い目」が関与する集合的かつ実践的なものである(pp. 180-181)．それぞれの推論のスタイルはある特定の時代に登場し，固有の発展の経過をたどる．ときには先に挙げたルネッサンスの類似に基づく推論のように，歴史の過程において消滅してしまうこともある．ハッキングのスタイル論は，単数形の「科学」について語るのではなく，それぞれが一定の歴史的条件に規定された複数の合理性に目を向けようとする．ただし，ハッキングは同時に，自己保証的な推論のスタイルを持つ知的探究からそうでない探究を区別しようとしている．この点でスタイル論は，「科学に特有のものを説明し，それをある程度人文学的・倫理的探究から区別する保守的な戦略」(p. 196)でもある．このような保守性は，例えばアーノルド・デイヴィッドソン(Davidson, 2001)やフォレスターが推論のスタ

イルを精神分析に応用しようとしたとき、ハッキングが示した冷淡な反応に現れている。すなわち、精神分析は「創始者の権威に基づく方法」に過度に依存しているがゆえに、独自の推論のスタイルを備えた科学とは認められない、というのである<sup>11</sup>。

すでに「夢の読者たち」に即して検討したように、フォレスターにとって精神分析における「フロイト」という個人の機能は、単なる「創始者の権威」として片づけられるものではない。そこには、批判的な読者・患者の存在を前提しつつ、知識を生産・伝達していく戦略が認められるのである。「夢の読者たち」に先行する論文「p であるとするれば何か—ケースによる思考—」（1996年初出）は、ハッキングのスタイル論に残されていた保守性を乗り越え、精神分析を含む複数の領域に見出される「ケースによる思考」を、新たに推論のスタイルのリストに加えようとする試みである<sup>12</sup>。その発想の核心にあるのは、フォレスター自身の師でもあるクーンの「模範例」（*exemplar*）という概念である。『科学革命の構造』で提示した「パラダイム」があまりに多様な仕方で受容されたことをうけ、その内容を限定するためにクーン（1998 [1977]）が導入した概念のひとつであるこの「模範例」を、フォレスターは次のように説明する。

模範例とは、新米の専門家がそれに基づいて彼らの科学を学ぶ標準的な実験であり、教科書に現れる標準的な問題であり、研究領域の全体および知識の最終的な集合体を規定し、限定する模範的な達成である。私たちがいかに科学をなすべきかを学ぶのは、規則、原理、または概念を学び、これらを具体的な状況に適用することによってではない。むしろ私たちは、模範例を用いてどのように作業をするかを学ぶこと、すなわち、これらの模範を拡張し、再現し、新しい状況をよく理解されている模範例の一バージョンに変えることで、いかに科学をなすかを学ぶのである。（Forrester, 2016a, p. 7-8）

あらゆる状況に応用される一般の原理ではなく、一定の特殊な模範例を共有し用いることによってこそ科学的知識が組織化され、安定性を得る—このこと

は、「夢の読者たち」で分析された、フロイトの自伝的夢が同時に精神分析の理論と方法を伝達する公的媒体となる、という『夢解釈』の性格にもあてはまる。ここでフォレスターは、「模範例」という概念を精神分析における「ケース」、すなわち「症例」のナラティブ全般に適用する。

従って精神分析的言説は、2つのおよそ共存しそうでない特徴を結合する。この言説は、20世紀において人生を語る新しい仕方、人々の人生をまさに彼らの人生とする特異かつユニークな事実の新しい形態を約束する。それと同時にこの言説は、人生を語るこの仕方を公的なものに変え、科学的なものにしようと試みるのである。これらの2つの目的を橋渡しするものこそ症例であり、この症例には、「臨床的著作」と呼ばれるものを次第に支配するに至った転移・逆転移現象の興味深い、特有のナラティブが伴うのである。(p. 12)

ギンズブルグがその「徴候的パラダイム」論で触れていることであるが、個別的な症状や損傷の細部に注目する症例記録には、古代医学にまで遡る伝統がある。フォレスターは、この「ケースによる思考」という推論のスタイルが思いのほか広い射程を持っていることを、具体的な分析により示していく。通例の医学史に従えば、臨床的な症例に基づく方法は、因果的説明や実験的探究を重んじる組織病理学や細菌学が発展することにより、徐々にその地位を低下させていったとされる。だが、19世紀末において「個別的なケースの分析」により特徴づけられる徴候的パラダイムが再浮上する、というギンズブルグを補足するように、フォレスターは同時期の医学において予期せぬ仕方でも症例のナラティブが再登場することを指摘する。症例のモデルは、英米法における教育の「ケースメソッド」を介して、「医学的実践の本質的要素を模写し、再演する教育的道具として」医学に再導入されるのである。すでに1870年代、「訴訟や判例の紛糾した網の目を法の科学として提示する」必要に直面したアメリカの法学者ラングデルは、法学の教育に「ケースメソッド」を導入していた。このケースメソッドにおいては、学生は個別の事例の綿密な読解から「事例に埋め込まれた暗黙の合理的な法体系の全体」を自ら発見することが求められる。ケー

スメソッドはその後、実践的・職業的な知識の領域にふさわしいものとして、医学やビジネスといった領域に取り入れられていく (pp. 14-18) . 個々のケースを通じて、数あるデータの中から判断 (診断, 判決) を下すうえで重要な要素を見抜く能力を養成するプロセスが、これらの領域における実践の合理性を構成するのである。

またフォレスターによれば、個別的事例の分析という点以外にも、ケースメソッドには精神分析と接する特徴がある。学生に自ら最良の議論、最良の判断を発見させるケースメソッドの教育は、専門家として知識を有しているにもかかわらずこれをそのまま伝えようとしない教師に対する反発を生む。そこで教育者は、自身と学生たちの関係そのものをメソッドに折り込み、学習の過程そのものを対象としていくことを余儀なくされる。こうして「再帰性、ならびに集団のプロセスと力学に対する感受性が、教育のケースメソッドの主要な部分となったのである」 (p. 18) <sup>13</sup>。こうしたアプローチが、読者の批判を織り込みながら議論を進める『夢解釈』の戦略と重なることは明らかだろう。以降フォレスターは、このような再帰性を、精神分析における症例のエクリチュールを統御するものとして検討していく。例えば、ジェンダー論の先駆者として名高い精神分析家ロバート・ストーラーの症例を扱った論文では、分析家が患者（「ベル」）の白昼夢に組みこまれていく転移のプロセスを通じて、性的興奮に関するストーラーの理論が構築されていくことが明らかにされる (Forrester, 2016b) . フォレスターのこれらの「ケース」論は、精神分析における個と普遍、および再帰性に関する彼の思考の到達点をなしているのである。

## 結びにかえて

最後に、このようなフォレスターの業績が今後の精神分析研究に対して持つ意義について、いささか駆け足となるが見通しを述べておこう。従来、精神分析の実践は、しばしばいくつかの逆説により特徴づけられてきた。例えば、客観的な知識をもたらす科学としての地位を要求するにもかかわらず、精神分析は自己に対する誠実さを要求する「倫理」としての性格を持たざるをえない (Rieff, 1979[1959]) . また精神分析のエクリチュールは、対象を記述する認知的機能

を果たしつつも、同時に書き手の主観性を巻き込む「フィクション」という性質を帯びている (Certeau, 2016, ch.3) . フォレスターが指摘した再帰性の問題は、精神分析のこうした諸側面を(そのいずれかに還元することなく)総合的に理解する視点を提供しているように思われる。さらに興味深いことに、フォレスターはある論文で、精神分析における再帰的次元に最も自覚的に焦点を当てた人物としてラカンの名を挙げている<sup>14</sup>。「分析家の欲望」を問い、分析家の養成をこそ「純粹精神分析」と看做すラカンの理論と実践を、「再帰性」という枠組みから再度検討するとき、そこにはどのような思想的意義が見出せるだろうか—こうした新しい研究の展望を開くものとして、フォレスターの著作は今後も読み返される価値を有していると思われるのである。

## 註

1. フォレスターに関する総論としては、すでに Mayer (2017) がある。本稿は「再帰性」という主題の強調や扱うテキストの選択においてマイヤー論文から大きな示唆を受けているが、フーコーやティンパナーロ、ギンズブルグらとの関係をさらに掘り下げることで、立体的にフォレスターの仕事を提示することを試みる。
2. この論文は、「フーコーと精神分析」というタイトルで1980年に発表されたテキストを基にしている。本稿での引用は『精神分析の誘惑』所収の版に従う。
3. ギンズブルグの論文は、この他にも 1)歴史学におけるミクロストリアと数量史の緊張関係、2)支配階層の圧力により粉碎された民衆の歴史意識の断片として、フォークロアに注目するグラムシ、デ・マルティノーらイタリア左派の社会科学、3)都市の中に消し去られた個人の痕跡を探り当てる遊歩者＝探偵、というベンヤミンの議論(『パサージュ論』)、といった多様な観点から読み直される必要があるだろう。
4. 精神分析においてフロイトが占める特権的地位、というこの問題については、ラカン、グラノフ、ルスタンといった分析家からデリダのような哲学者に至るフランスにおける議論もまた、フォレスターの考察の背景をなしている (Forrester, 1990a) .
5. これは元々デリダが提起した問いであり (Derrida, 1980, p. 325) , デリダの精神分析に対するアプローチを理解するうえで重要な論点であるが、詳細は別稿に譲らざるを得ない。
6. マイヤーが指摘するように、「夢の読者たち」はラトゥールのアクター・ネットワーク・セオリーから少なからぬ着想を得ていると考えられる (Mayer, 2017, p. 158) .
7. フォレスターは、実際にこのような抑えがたい「誘惑」が読者に存在したことを、アブラハムやユングの例から証明している (Forrester, 1997a, pp. 138-140) .
8. フォレスターは「フロイト戦争からの特電」 (Forrester, 1997b) で、症例や患者の証言といった精神分析史の資料＝エヴィデンスが分析家—患者の転移関係を媒介して構成されていることを示すとともに、「フロイト戦争」でなされたフロイト批判がこうした視点を欠落させていることを指摘している。

9. フォレストターの『夢解釈』論を発展させ、書物をその著者による創造物としてのみ扱うのではなく、多様なコンテキストにおける読書（消費）を通じて絶えず意味を与えなおされるものとするロジェ・シャルティエの読書の文化史と接続したものに、Marinelli & Mayer (2009) がある。
10. 「読者」こそ「フロイディアン」の条件とする「夢の読者たち」の分析は、精神分析運動の内部と外部の境界を問い直そうとする、一貫したフォレストターの姿勢の表れでもある。『絵葉書』におけるデリダの議論とも関連するこの点については、とりわけForrester (1990a) を参照せよ。
11. スタイル論の精神分析への応用に対してハッキングが示した態度については、Kusch (2010) およびMayer (2017) をみよ。
12. 従ってマイヤーは、フォレストターの「ケース」論をハッキングのスタイル・プロジェクトに持ち込まれた一種の「トロイの木馬」と表現する (Mayer, 2017, p. 161) 。
13. ストラーの症例を扱う論文でフォレストターが言及しているように、精神分析を教育や統治同様に「不可能な職業」と看做すフロイトの「終わりのある分析と終わりのない分析」をここで想起してもよいだろう (Forrester, 2016b, p. 65 ; Freud, 1950, 94) 。
14. 「(…) ラカンがなした前進は、分析の再帰性（それ自身の前提条件としての分析）に焦点を当てることであり、各々の分析においてフロイトの発見を再創造する (…）ことである。ラカンは分析の中心を、教育分析ないしは訓練分析に置きなおす。(…) ラカンの教育のテロスは、分析家である。他の分析家が症状を出発点とするところで、ラカンは訓練中の分析家候補生の症状を、理論および解釈の両面における入場口と看做す。では候補生の症状とは何か？分析家となる欲望である」(Forrester, 1990a, p. 230) 。

## 参考文献

- Certeau, M. de. (2016). *Histoire et psychanalyse entre science et fiction*, Gallimard.
- Davidson, A. (2001). *The Emergence of Sexuality. Historical Epistemology and the Formation of Concepts*, Harvard University Press.
- Derrida, J. (1980) « Spéculer – sur “Freud” », in *La carte postale*, Flammarion, p. 275-437.
- Forrester, J. (1980). *Language and the Origins of Psychoanalysis*, MacMillan.
- (1990a). “Who is in analysis with whom? Freud, Lacan, Derrida”, in *The Seduction of Psychoanalysis: Freud, Lacan, and Derrida*, Cambridge University Press, pp. 221-242.
- (1990b). “Foucault and the History of Psychoanalysis”, in *The Seduction of Psychoanalysis*, Cambridge University Press, pp. 286-316.
- (1997a). “Dream Readers”, in *Dispatches from The Freud Wars. Psychoanalysis and its Passions*, Harvard University Press, pp. 138-183.

- (1997b). “Dispatches from the Freud Wars”, in *Dispatches from the Freud Wars. Psychoanalysis and Its Passions*, Harvard University Press, 1997, pp. 208-248.
- (2016a). “If p, Then What? Thinking in Cases”, in *Thinking in Cases*, pp. 1-24.
- (2016b). “The Psychoanalytic Case: Voyeurism, Ethics and Epistemology in Robert Stoller’s *Sexual Excitement*”, in *Thinking in Cases*, pp. 65-88.
- Foucault, M (1966) *Les mots et les chose. Une archéologie des sciences humaines*, Gallimard.
- Freud, S. (1942). *Gesammelte Werke*, Band II, Unter Mitwirkung von Bonaparte, M., hrsg. v. Freud, A., Bibring, E., Hoffer, W., Kris, E., Isakower, O., S. Fischer.
- (1950). *Gesammelte Werke*, Band XVI, Unter Mitwirkung von Bonaparte, M., hrsg. v. Freud, A., Bibring, E., Hoffer, W., Kris, E., Isakower, O., S. Fischer.
- Ginzburg, C. (2010 [1979]) « Traces. Racines d’un paradigme indiciaire », tr. par Aimard, M., in *Mythes emblems trace. Morphologie et histoire*, Verdier, p. 218-294.
- Hacking, I. (2002a). “Language, Truth, and Reason”, in *Historical Ontology*, Harvard University Press, pp. 159-177. (「言語、真理、理性」『知の歴史学』出口康夫、大西琢朗、渡辺一弘訳、岩波書店、317-350頁。)
- (2002b). ““Style” for Historians and Philosophers”, in *Historical Ontology*, Harvard University Press, pp. 178-199. (「歴史家にとっての『スタイル』、哲学者にとっての『スタイル』」『知の歴史学』出口康夫、大西琢朗、渡辺一弘訳、岩波書店、351-394頁。)
- Inoue, T. (2017). « La méthode freudienne mise en contexte historique. Le « paradigme indiciaire » revisité », *Cahier multiculturel du Maison du Japon*, 11, p. 49-59.
- Kusch, M. (2010). “Hacking’s Historical Epistemology. A critique of Styles of Reasoning”, *Studies in History and Philosophy of Science*, 41, pp. 158-173.
- Marinelli, L. & Mayer, A. (2009). *Träume nach Freud. Die »Traumdeutung« und die Geschichte der psychoanalytischen Bewegung*. Turia+Kant.
- Mayer, A. (2017). “Why Does Psychoanalysis Matter to History and Philosophy of Science? On the Ramifications of Forrester’s Axiom”, *Psychoanalysis and History*, 19 (2), pp. 151-165.

Rieff, Ph. (1979 [1959]). *Freud. The Mind of The Moralists*, The University of Chicago Press.

Timpanaro, S. (1985 [1974]). *The Freudian Slip. Psychoanalysis and Textual Criticism*, Kate Spor (trans.), Verso.

トーマス・クーン(1998 [1977])「パラダイム再考」『本質的緊張』, 安孫子誠也, 佐野正博訳, みすず書房, 379-414 頁.